

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

西島清順 プラントハンター
Seijun Nishihata / Plant Hunter



CREATOR INTERVIEW ^{No} 72

西島清順 Nishihata Seijun

そら植物園代表。1980年生まれ。幕末より150年続く花と植木の卸問屋の五代目。日本全国・世界数十カ国を旅し、収集している植物は数千種類。日々集める植物素材で、国内はもとより海外からの依頼も含め年間2000件もの案件に応えている。2012年、ひとの心に植物を植える活動"そら植物園" をスタートさせ、植物を用いたいろいろなプロジェクトを多数の企業・団体などと各地で展開、反響を呼んでいる。

会議室を飛び出して
大きな木の下で話をしよう。



No
72

西畠清順 プラントハンター

Seijun Nishihata / Plant Hunter

クリエイターインタビュー

『六本木の未来を語ることは、緑を語ること』【前編】

photo_ryoma suzuki / text_kentaro inoue

「ひとの心に植物を植える」をテーマに、世界中で植物にまつわるプロジェクトを手がける、そら植物園 代表で、通称 "プラントハンター" の西畠清順さん。「六本木アートナイト 2016」では、名和晃平さんとともに、六本木の街に文化の夜明けを象徴する「森」を出現させます。清順さん曰く「未来を考えるのは植物を考えることと同じ」。その理由とは？

すべては、植物からはじまった。

このインタビューのテーマは「六本木 × 未来 × 植物」と聞いてますが、僕に言わせれば、未来イコール植物。大げさにいえば、未来を考えるのは植物について考えるのと同じだと思っています。

歴史を見れば未来がわかるって、よく言いますが、4億5000万年前に植物が地球上に陸したとき、この地球には文化もなければ、宗教もアートも何もありませんでした。そういう意味では、植物はすべての素。最先端の技術を追求すればするほど、本当に大切なものは何なのか、その大本に立ち返らないといけない。感度のいい企業、時代をつくるようなクリエイターやアーティストは、みんなそれに気づきはじめている、今はそんなタイミングでしょう。

僕は関西人なのであんまり詳しくないんですけど、六本木は、時代の最先端が具現化された場所だと感じています。この街が、東京で、日本で、あるいは世界で指折りの場所を目指

すとしたら、当然、緑や植物についても先進的であるべきですね。

「何本植えました」ではなく「あるよね」と気づかせる。

六本木で街頭インタビューをして、「この街って緑多いですか？」って聞いたら、「多い」って答える人はけっこう多いんじゃないかと思うんです。でも、「東京ミッドタウンにどんな木植わってました？」「あそこの通りの街路樹なんでしたっけ？」って聞いたら、「あれ、何の木やったかな……」ってなるはず。

みんな、ここに有名建築家の手がけた建物があるとか、おいしいパン屋さんがあるとか、という情報には詳しいのに、自分が住んでいる街の街路樹の種類すらわからない。企業のCSR活動なんかを見ている、「どこどこに木を何本植えました！」っていう、本数重視の場合がほとんど。

でも、もっと質重視、メッセージ重視で、人の心を打つやり方は絶対あるはず。たとえば「今の3倍六本木に木を植えよう」じゃなくて「ここにちゃんと木があるよね」って気づかせる考え方が大切。まずはそれを六本木から発信できたら、世の中変わるんじゃないかな、って。

「たかが」を「されど」にするのはプレゼンしだい。

"気づかせる"ひとつのヒントは、手前味噌ですけど「代々木VILLAGE」がいい例。そこでは「共存」をテーマに、世界各国を代表する植物が集まって仲良く暮らす世界をつくっています。

ガーデナーやランドスケープの人たちは、どうしても植物をデザイン、コーディネートしようとはしますが、本当に大切なのはコンセプト。だから僕はその粋を1回取り払って、普通は絶対しないような組み合わせを選びました。中国の木の横にペルーの木があって、その横にアルゼンチンの木、オーストラリアの木……。そうすると「これ、一緒に暮らしてて大丈夫なのかな？」って心配になりますよね。これも"気づかせる"ひとつの方法。

木のプロフィールを書いたプレートにも、難しい科名・属名・種名ではなく、僕のつぶやきみたいなコピーを載せています。それがすごく面白いって言われて、実際いくつかの市町村から街路樹のプレートをつくってほしいという依頼もありました。そう「たかがケヤキ」を、いかに「されどケヤキ」にするかは、プレゼンテーション次第なんです。



代々木 VILLAGE

コンセプトプロデュースを小林武史氏と大沢伸一氏、インテリアデザインを片山正通氏が手がけた商業施設。敷地の大部分を占める庭には、樹齢500年のオリーブの大木や100年に一度咲く花、世界一痛いサボテンなど、世界中から集められた植物が植えられている。



photo_ryoma suzuki / text_kentaro inoue

日本で目にする街路樹は流通に乗ったものばかり。

普通に考えるなら、街には緑が多いに越したことはないでしょう。だって、人間が建物をぶっ建てる前は、緑に覆われていたから。今この場所から東京ミッドタウンの庭を眺めてみても、ソメイヨシノもあるし、ケヤキもあるし、向こうにヒマラヤスギも見える。プラタナスやクスノキ、イチヨウ、セコイアっていう世界一大きくなる木もあれば、モミジも柳もあります。

いろんな種類があるのはいいんですけど、日本で目にする街路樹って、流通に乗ったものばかり。そもそも、街路樹はこうでなくてはいけない、っていう法律はないんだから、もっと多様性を持たせられるはずだし、曲がった木や古い木を使ったっていいはずなのに。

海外に行くと、街路樹の中にポンと、樹齢何百年みたいな木があるんです。でも、そういうことを知らないから、流通にのった木をただ落とし込むだけになっちゃう。「六本木には緑が多いですね、じゃあ代官山の緑と何が違いますか？」と言われても答えられない。そもそも同じパレットの中から絵の具を選んでいるようなものだから、当たり前ですよ。

新しい街に、1本1本違う街路樹を植えた理由。

僕がプランツディレクターを務めた複合施設「パークシティ大崎」は、まったく違う考え方で行われています。たとえば、街路樹を決めるにあたって提案したのは、1本1本違う並木でした。

コンセプトは「オーガニックシティ」。この話をしはじめると明日の晩までしゃべらないといけないので簡単に説明すると(笑)、オーガニックとは「有機的」という意味。「有機的」という、なんとなく「無農薬」みたいなイメージがありますが、そうじゃなくて、本来は異なる要素が集まってひとつの集合体をつくっている様子を表した言葉なんですね。

パークシティ大崎の計画には、商業施設、住宅、エンターテインメントや公園、オフィスもあって、いろんな要素から街が成り立っていました。まさに異なる要素が集まってできる、有機体のような街です。それをよく使われる意味合いの「有機的」と掛けて、街づくりできないだろうか、と考えました。「自然に寄り添った街をつくる」ことをテーマにしているのに、同じピッチで同じ高さに切りそろえられた同じ種類の木が植わっているほど不自然なことはないでしょう？僕はランドスケープデザイナーでも庭師でもないけれど、植物の専門家としてプロジェクトに関わる以上は、街路樹ひとつでも、そのコンセプトを体現したいと思ったんです。



パークシティ大崎

2015年に竣工した、住宅棟や商業棟など全7棟からなる大規模複合開発。3.6haの敷地のうち約30%が緑地で、アスナロ、クス、シラカシなど7種類の街路樹のほか、交差点にはオリーブ、シダレザクラなどのシンボルツリー、街区の7カ所にガーデンが配置されている。

【or・gan・ic】

①有機体の、生物の[から生じた]②有機[組織, 系統]的な③a) (動植物の) 器官の[を持つ]、b) 器質性の④<変化・発達などが>緩やかな、自然の⑤(... に) 根本的[実質]的な; 固有の; 構造上の; 基本的な(GENIUS 英和辞典より)

【有機的な】

有機体のように、多くの部分が集まって一個の者を作り、その各部分の間に緊密な統一があって、部分と船体とが必然的關係を有しているさま。(広辞苑より)

メッセージは死んだ頃に伝えればいい。

最初はもちろん、「前例がない」と反対されました。でも、海外の事例などを一つひとつ説明していくうち、なんとかそれを実現しようとして一丸となってくれた。「街路樹なんて1種類でいいじゃん」って言ってた人たちの脳みそが、少しずつ有機的になってきたんですね(笑)。

たとえば、パリのシャンゼリゼ通りは、きれいに刈り込まれたプラタナス並木ですが、裏側のフォッシュ通りの並木はガーデンのようになっていて、いろんな種類の木が自由な間隔で植わっています。そこを、おじいちゃんおばあちゃんが散歩しているんですよ。

なにより、自分が死んでも自分が植えた木は残ります。会議で決めたことが100年後まで

影響すると思ったら、やり逃げできない。ランドスケープは、建築よりもずっとスパンが長いですから。今は植えたばかりだからわからないけど、10年後、20年後には全然違うタイミングで花が咲いたりするでしょう。そんな僕のメッセージが、死んだ頃くらいに伝わればいいな、って思ってる。



西島清順 プラントハンター
Seijun Nishihata / Plant Hunter

photo_ryoma suzuki / text_kentaro inoue

注目すべき「緑の街」は、ポートランドとシンガポール。

植物の街という観点でいえば、注目すべきなのはポートランド。日本では、葉っぱが落ちて苦情がくるということで、つんつるてんになった街路樹をよく見ますけど、ポートランドの街路樹は、道路をまたいでとなりの公園まで枝を広げていて、すごく気持ちがいい。

これは、指定業者がルーティンの管理をしている今のシステムが崩れない限り変わらないでしょう。東京では、オリンピック・パラリンピックが決まったことで、街路樹をできるだけ剪定せず、日陰をつくらうという動きがあるそうです。でも、それってふだんの剪定の仕方は間違っているって認めているようなもの。毎年たくさんの方が熱射病になっているんですから、緑で街を覆ったら全然違うのに。

待っている人に植物を届ける、それがプラントハンター。

もうひとつはシンガポール。建国の父リー・クアンユーが、独立したばかりでお金もなかった時代に、「この国を緑の国にするんだ」と言って、世界中からいろんな植物を集めて植えま

くりました。それが国土を覆って「ガーデン大国」と呼ばれるまでになったし、実際温度も下がっているらしいんです。当時は誰もついていけなかったみたいですが、先見の明がある方だなあ、と。

大きくなりすぎてしまった枝はバイオマスにして、「ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ」という巨大植物園の冷暖房エネルギーとして使っています。2016 年は、シンガポールと日本の国交 50 周年ということで、政府悲願の花見のイベントをやりたいって頼まれて、日本中から大量に桜を集めて開花調整して輸出し、見事に花を咲かせました。そうしたら、とんでもない数の人がやってきて。なんと、リー・シェンロン首相までお越しになったそうです。

この桜もそうですが、世界には、行きどころがなくて困っている木がたくさんあるんです。そのままだったら日の目を見ない木を、待っている人たちに届ける。それがプラントハンター。農家は潤い、クライアントは喜び、見に来たお客さんもハッピーになる。これが僕らの仕事の醍醐味なんです。



Blossom Beats

2016 年 3 月、シンガポールの植物園「ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ」で行われた、日本の春の花をテーマにしたイベント。巨大な温室「フラワー・ドーム」に、20 種類以上の桜のほか、桃の花などを展示。世界中でニュースとなり、週末だけで 2 万人もの来場者を集めた。

アートを通して「植物っていいな」と感じてもらいたい。

「六本木アートナイト 2016」では、名和晃平さんとコラボをさせていただきますが、それも同じで、植物を使って何かやりたいというオーダーに、全力で応えるだけ。最初は「秋に、六本木で桜を咲かせてほしい」という相談だったんですよ。それが、話を聞いているうちに、世界を旅した鹿が六本木にたどり着いたってという設定に変わっていきました。

世界の植物でできた森の中に、突如現れるエーテルと鹿は象徴的。なにより、たった 2 日間のイベントのために森をつくるなんてでかい話が、2 人のケータイのメール何回かで決まっちゃったのがすごい（笑）。

もちろん、僕は植物屋なので、お客さんのところに植物を届けるのが仕事。でも、そういう機会を通して、「植物っていいな」と感じてもらうのが " 魂胆 " なんです。その魅力を誰かに伝えるときに、アートという手段はとても有効。僕はアートについてはまったくわからなかったんですが、35 歳になってようやく面白いなと感じはじめました。



六本木アートナイト 2016

2016年10月21日(金)~23日(日)まで開催。メインプログラムでは、名和晃平氏が、西畠氏、風船を使った造形ユニット「デイジーバルーン」とコラボ。六本木ヒルズアリーナのほか、東京ミッドタウン、国立新美術館の3カ所に、文化の夜明けを象徴する森を出現させる。

2020年を、歴史上類を見ない有機的なオリンピックに。

この間、リオデジャネイロオリンピックの開会式を観ていたら、国旗を持って入場する選手団と一緒に、鉢植えを持った人が歩いていました。これ、僕にとっては大事件なんです！そのあと選手が鉢に種を植えるパフォーマンスもあって、それが草木をイメージした五輪マークに変わる。ストーリーもちゃんと紡いであって、すばらしいなって。

このストーリーを、2020年の東京オリンピック・パラリンピックでバージョンアップさせたんですよね。4年前に植えた苗がここまで育ったよ、みたいなのもいいかもしれないし、これからのオリンピックは地球と自然に寄り添っていくんだってアピールをする。歴史上類を見ないくらい有機的なオリンピック。きっと、みんな賛同してくれると思うんです。

未来の六本木の緑は どうなる？

東京も六本木も、何もしなかったらこのまま。10年後も20年後も想像できる。でも、みんな10年後20年後、もしくは自分の死んだあとに、劇的によくなってほしいと思っているわけじゃないですか。だったら、それに向けて今、何をすべきかって話になりますよね。

冒頭でも話したように、お金さえかければいくらでも緑を足すことはできるんですけど、そうじゃなくって、今あるものをどう生かすか、どうプレゼンしていくかが重要。代々木 VILLAGE にしても、最初は全部、流通にのった植物を使うって決まっていたんです。でも、プロデューサーの小林武史さんが「これじゃあ、よくある商業施設と同じになっちゃう、だから思いきりやってくれ」って。

そのとき僕は言ったんです。「同じ条件でも3倍くらい意味がある緑化をしますから」って。結果的に、あんなに小さい施設なのに、毎月数万もの人が集まるようになって、いろんなデベロッパーが視察にくるようになり、緑をふんだんに取り入れた商業施設が次々できました。条例があるから緑化しなくちゃいけないとか、建物のおまけとして植栽を考えるんじゃなくて、緑がブランディングの中核に据えられる「集客装置」になりえることに、気づいてもらえたんだと思っています。

緑の未来会議、6つの森で屋外ギャラリーを。

ここ六本木でも街路樹や植物をメディアにして、メッセージを発することができたら面白い。

あとは、本気で街をよくしようと思っている人たちが集まって話し合ったり、植物が大好きで、それを広めようと大真面目に活動している僕みたいな人間の話を書いてくれたりする場があったらいいですね。いろんなジャンルの有識者や街の人、偉い人が集まって、六本木の緑の未来について考える会議、もしくはガーデンパーティみたいな。大きな木の下で話すと、いいアイデアが生まれますから。会議室で難しい顔で話しててもあかんのですよ。

あ、もう1個浮かんだ。せっかく六本木という名前なんだから、6つのコンセプトで森をつくって、アーティストが作品を発表する屋外ギャラリーにするのはどうですか？ ほんまに考えてって言われれば、いくらでも出てきますよ。僕は、植物についてのアイデアだけは湯水のように浮かんでくるから。ここから先は有料になるかもしれないけど（笑）。

取材を終えて

次の予定が迫るなか「時間ギリギリまでいこう。だってこれ、実現したら面白いよ!」と清順さん。撮影は、アートナイトで作品が展示される、東京ミッドタウンのパブリックアート前で。どんな作品になるのか、当日をお楽しみに。

(editor_kentaro inoue)